

# NCC 宗教研究所 ニュース

〒602-8011 京都市上京区烏丸通下立売上ル桜鶴円町 380  
 振替：01060-6-2555  
<http://nccisjpnew.wixsite.com/ncccenter>

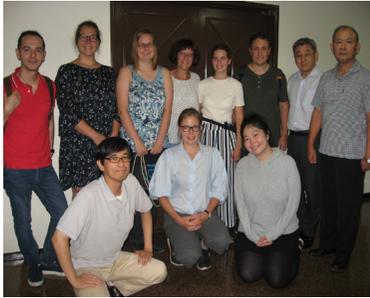
Tel: (075) 432-1945 Fax: (075) 432-1946  
 E-mail: [studycen@mbox.kyoto-inet.or.jp](mailto:studycen@mbox.kyoto-inet.or.jp)  
<http://nccisjpnew.wixsite.com/nccisjp>

## 「日本の諸宗教に学ぶー 対話と研修 (ISJP) 二〇一八」

岩野祐介

今年度も十月より、ISJ (Interreligious Study in Japan Program) がおこなわれました。今年度は、七名の参加者をドイツ、スイスからお迎えしました。

このように多くの参加者をお迎えできていることには、研究所としても大変なやりがいを感じております。ご協力くださっている教会の皆さま、賛助会員の皆さまには深く感謝申し上げます。本当にありがとうございます。また、参加者とスタッフ (九月十八日)



例年共同運営パートナーとして参加者を紹介してくれているドイツの教会間協力組織 EMS (Evangelical Mission in Solidarity) にも改めて感謝せねばならないと思っております。

参加者の来日がちょうど台風ラッシュなど重なり(関空が使えなくなつた時期です)、心配もあったのですが、今年度も、和氣満々としたいへんよい雰囲気が進みました。参加者のお一人がお誕生日を迎えられた時は、シャンパンをもつてきてお祝いをしていました。ちょうど講義で居合わせた私と、川原崎さんもご相伴にあずからせてもらいました。

今期は、サンドラ・マリイ・ベヴェルンゲンさん(ゲッツェンゲン大学大学院)、ハンネス・ブラード・ヴェルネルさん(テュービンゲン大学大学院)、カツソラ・ロレンゾさん(ドイツのプファルツ地方代理牧師)、ミリア・ランゲさん(ミュンスター大学大学院)、マリイ・テレス・ルイポルドさん(テュービンゲン大学大学院)、マヤ・ペトルスさん(スイスの教会牧師)、リコ・ペツトルドさん(シーメンス社コンサルタント)の七名の皆さんをお迎えしました。

ISJPの参加者の多くは神学部の学生・院生や、現役の牧師の方ですが、学びたいという希望があるのであればその他の職種の方も歓迎しています。

以前には、リーさんというシンガポールの鉄道関係のエンジニアの方も参加されました。その後もときどき日本を訪ねてこられて、当研究所にもお立ち寄りくださいます。期間中、参加者一同で関西学院大学を訪問された際、ちょうど学内に献血車が来ていて、リーさんは、せっかくだからと献血までしていかれました。また二〇一七年度は、スイスから、カトリック司祭のロルフ・ツムテュルムさんが参加されました。プログラ



オリエンテーションと歓迎会



ム終了後は、徒歩で長崎まで二十六聖人の旅路をたどる巡礼をされたとのことでした。

他にも、色々な方をお迎えしてきました。ずっと半袖シャツで、寒いのではないかな、と思っていたところ、日本で

服を買いたいけれどどれもサイズが小さすぎる、と困っていた方（たしか、柔道をやっていると言っておられたと思います）もおられました。カレーライスが気に入って、毎日食べ歩いているという方もおられました。

ヨーロッパの皆さんは日本人的感覚から見ると、非常に自由な感じで、一緒に伏見稲荷大社のフィールドトリップに行ったところ、「夕方から行きたいところがある」、あるいは面白い深い竹藪の道があったり、「雰囲気がいいからこっちに行ってみよう」「自力で帰れるから大丈夫」等々、どんな頭数が減っていったらいいか、自転車を停めていた大鳥居のところまで戻ってきたのは私をふくめ二人だけ、などといったこともありました。天理教本部神殿訪問のため天理に行く途中、JRの車窓から任天堂の社屋が見えて、「あれが任天堂！」と大変感激していた方もおられました。いろいろな参加者の方から、それぞれ、興味深い「日本滞在記」を聞かせてもらいました。わ

たしも数年前、もう少し若かったころは色々お出かけにつきあつたりさせてもらいました。

もちろんISJPの内容はフィールドトリップだけではなくありません。宗教間理解、宗教科間協力をテーマとする七つのコースで、全一〇回の講義を英語で実施しています。「仏教」、「仏教テキスト講読」、「日本のキリスト教」、「神道と民俗宗教」、「新宗教」、「Theology in Dialogue」、「日本の文化と歴史」です。

「仏教」は、マイケル・コンウェイ先生（大谷大学）、トーマス・カーシュナー先生（臨済宗僧侶）のご担当です。

「仏教テキスト講読」は、寺本知正先生（当研究所研究員、浄土真宗本願寺派僧侶）をメインに、市川定敬先生（仏教大学、浄土宗僧侶）にもご担当いただいています。

「日本のキリスト教」は、様々な立場の講師が関わっています。日沖直子先生（南山宗文化研究所）、ロジェ・ヴァンジラ・ムンシ先生（カトリック司祭、南山大学）、山本俊正先生（関西学院大学）、岩城聡

授業（仏教テキスト講読）



先生（日本聖公会司祭）、クラウス・シュベネマン先生（同志社大学名誉教授）、そして岩野祐介（関西学院大学、当研究所副所長）です。

「神道と民俗宗教」は、ペトロ・クネヒト先生（南山大学名誉教授）がご担当くださっています。

「新宗教」は、岡田正彦先生（天理大学）、森下三郎先生（天理大学）、那須英勝先生（龍谷大学）、クリスティアン・トリール先生（関西学院大学）のご担当です。

「Theology in Dialogue」は二〇一五年九月関西学院大学神学部と当研究所との間で学

術交流、国際交流及び教育研究面における相互協力を推進することを目的とした授業の提供による科目です。担当は、神学部教授のダヴィッド・ヴィダー先生で、毎年、関西学院大学の学生さんと一緒に授業をしています。

「日本の文化と歴史」は、二〇一八年度から新しく開講された科目で、デトレフ・シャウベッカー先生（関西大学名誉教授）がご担当くださいます。

フィールドトリップについては、市川先生、シャウベッカー先生、谷口愛紗さん（大谷大学大学院）が大変よくしてくださっています。谷口さんには、他にも日常生活に関するさまざまなコーディネーターや日本語クラス、「仏教テキスト講読」なども含め、来日前から参加者と連絡をとり、様々な面からプログラムを支えてくださっています。

開講前には、研究所スタッフによるオリエンテーションを行います。宮庄哲夫所長、土井健司副所長、岩野、谷口さんが担当しました（九月

十八日）。

十月から十二月までこれらのコースの講義が実施された後は、一週間東京でもフィールドトリップと特別講義からなるプログラムを開催しています。富坂キリスト教センターの岡田仁総主事が、全体をコーディネートして下さっています。



Theology in Dialogue（関西学院大学神学部チャペル、興聖寺・琴坂）

す。主なプログラムは、靖国神社と遊就館研修ツアー、浄土宗見樹院、鎌倉への一日ツアー（教団紅葉坂教会荒井仁牧師）、富坂キリスト教センターでのクリスマス会、NC

靖国神社（十二月十一日）



富坂クリスマス会（十二月十三日）



マイノリティ宣教センター（十二月十四日）



立正佼成会（十二月十五日）



C平和教育資料館、マイノリティ宣教センターでの研修、そして立正佼成会本部を訪問し、講義やデイスカッション

をしています。ここであらためて、岡田総主事のご尽力に感謝する次第です。最終日の日曜には、品川にあるドイツ語福音教会（Kreuzkirche）の礼拝にも参加します。

これで一応ISJPの公式のプログラムは終了しますが、この後、個人で様々なインターンシップを計画して、教団の佐渡教会、真命山（カトリックの諸宗教対話・靈性交渉センター）あるいは沖縄などに出かける参加者が多いです。

ドイツではEMSが主催して、参加者同士の振り返りの集いがしばしば行われているそうです。再来日して、プログラムを手伝ってくださいの方々もおられます。今後もこのプログラムがますます有意義なものとなり、ヨーロッパをはじめとした世界の皆さんに、豊かな宗教体験、文化体験の機会でありつづけてほしいと願い、NCC宗教研究所は運営にあたっております。皆様におかれましても、お祈り、ご支援をお願いしたく思います。（副所長）

### 《コーディネートから一言》

今年のプログラムのトピックスは、新しい滞在先として仏教大学の留学生寮が加わったことです。プログラム運営委員でもある仏教大学の市川先生の尽力で、研究生になることで大学の国際交流会館に入寮することができるようになりました。研究生の費用は発生しますが、寮費と合わせても他の滞在先と同程度です。寮での他の留学生との交流や仏教大学との関係等を考慮すると、プログラムの今後にとって嬉しいニュースです。今回はミリアさんとハンネスさんの二人の学生が入寮しました。寮はアジアから仏教を学びに来ている留学生がほとんどですが、彼らとの良い交流ができたようです。プログラムが日本だけでなくアジアとの交流を課題としていたことに一歩踏み出せるかと期待しています。

十二月十八日には参加者が自分たちで用意したお別れパーティーに集まりました。事情で先に帰国したマリーテ

レスさん以外の六名のうち二人が北海道旅行中でしたので、四名でしたが、上記の仏大の寮や大谷大学との交流会で親しくなった学生や留学生等五名が参加して賑やかな会になりました。その席で四名にプログラムの修了証を渡す際には、北海道旅行中の二名がスマホのビデオ中継で飛び入りするというハプニングもあり大いに盛り上がりました（写真左二人目リコさんの手のスマホ）。これもネット時代の参加の方法？（宮庄哲夫）

修了証授与



## 現代社会における「神」！、「神」？

土井健司

最近やたらと「神」の文字を目にする。

ネットニュースを見ていると、サッカーのアジアカップ戦で日本代表のある選手が、ゴール近くで相手チームの選手の放ったボールを手で遮った。言うまでもなく、サッカーでは手や腕を使うのは禁止されている。ハンドの可能性があったが、その場面ではたまたま当たったものと判断され、そのままで続行となった。記事によるとビデオ・アシスタント・レフェリー（VAR）の導入が近く予定されており、もし適用されていればハンドの可能性が高かったという。ここで注目したいのは、ボールを遮ったその手を指して、記事では「神の手」と表現していた。

人が意識して手で遮ったのであれば反則だが、そうではない。たまたまボールに手が当たってしまったその偶然性と、ゴールをとられず日本側

に有利に働いたことが重なって「神の手」と言われているのだろう。しかも、そういう言い方が以前からあって、定着している印象すらある。ちなみに「神の手」を検索してみると、スマホのクレイニングゲームの名前、あるいは優秀な外科医の手などを指すのに使われることも見られる。

他には「神対応」という言葉もよく目にする。理不尽だが執拗なクレームをつけるお客にたいして店側が丁寧に対応し、加えてお客が納得してクレームを止めるといった場合などに使われらしい。会社やレストランでの事例が見られる。ネット検索すると、「神の手」とは比べものにならないくらい多くの記事がヒットする。目立つのは、芸能人が番組のなかで示すもの。あるドラマの宣伝用の記者会見があったが、無事に終わった後、出演者が自分の目の前のテーブルを片付けはじめたところ

スタッフも恐縮し、彼の丁寧な対応に「神対応」と記す記事。ときどき見ている「モニタリング」という番組のなかで、大変失礼な質問を繰り返す雑誌記者に対してある芸能人が、決して怒らず、ときには冗談やダジャレでかわしつつ親切に対応したことを指して「神対応」という記事など。そういえばドラマで「神の舌をもつ男」というものもあった。「神」の舌！

さて宗教者として、単純にこれを喜んでよいのかどうか、悩ましいところであろう。

たしかに今の時代、「神」という言葉は、日常からは消えつつあり、私たちが普段生活するところでは使わなくなっている。その意味では、とにかく「神」という言葉が使われるのだから、それはよい傾向と言えるかもしれない。「神」という言葉に親しみ、何かしらリアリティを感じるどころがあるのだろうか。一概に否定することもない。

しかし、これも世俗化の一つでもあって、たんなるレトリックになっているとも言える。

「神対応」を口にする人が、だから信仰心をもつようになるとは思えない。なぜなら「神の手」でも「神対応」でも、これらはすべて述語であって、何かを形容する言葉だから。つまり何かについて述べられるものであり、ここでは「神」というものは主体としては現れない。私たちが祈り、語りかけ、応答を期待するような何か意志をもち、思惟し、人格的に対峙する、そういう主体的存在のことを言うのではない。あくまでも修飾語である。

それでも、私が専門とする古代世界を考えると、ギリシア語の「テオス」であれラテン語の「デウス」であれ、それらは元来いずれも述語的であったという。これはウイラモービッツ・メレンドルフという古典学者が百年以上も前に見出したことであって、この学説はいまでも否定されてはいないと思う。たとえば人が偶然出逢った他人を助けるといった場合、この行為は「神である」と言われる。行為について、である。それはその

偶然の出逢いと出来事の場合、神々しく経験されるからであり、その場において「神なもの」が現成してくるからであろう。

「神対応」と言われる「神」のうちには何か本心に宗教的なものが現われているのかどうか、正直、私には判断できない。「神」なるものが軽くなつて、アブナイものを感じるところもある。現代において「神」を語るのは難しい、とつくづく思う。（副理事長）

### 編集後記

いつもはクリスマス前に発行する「研究所ニュース」ですが、今回は「ISJP二〇一八」の報告を主とするためプログラム全体が終わる時期に発行を遅らせました。大変充実したプログラムになり、喜んでおります。プログラムは皆さまから頂いた寄付によって実施できております。ご支援を深く感謝する次第です。

(K・D)